

多くの方から「学校に要望があるときの伝え方が難しい」との相談を受けることがあります。

学齢期の生活は学校が中心になることが多いので、
ぜひ、学校と上手に連携を取りながら進めていただければと思っています。

学校と話を進めていくときに気をつけてほしいことや実際にどうするかについて書いてみました。
もちろん、個々の置かれている状況や地域、
現在の関係性などによって様々とは思いますが、
ぜひ、参考になさってください。

○学校はルールによってがんじがらめである
最初に知ってほしいことがあります。
学校は公的な機関であるということです。
そのため、みなさんが考えている以上に様々なルールに縛られています。
法的なルールはもちろんのこと、
行政から要請されているルール、
地域から要請されているルール、
保護者からのルール、
校内事情からのルールなど。

そのため、
どんなによいことであってもルールを外れて行うことができないのです。
そして、多くの場合できない理由を保護者の方にお伝えすることはできません。
言いたくても、してあげたくても、できない事情があることは知っておいていただきたいと思います。

しかし、
子どもたちの支援は待ったなしです。
多くの保護者の方が、自分の子どものことで真剣です。
学校ができない理由があるのは知ったけど、
学校で楽しく学んでほしいのですね

では、どうすればよいかということについて、
お話をさせてください。

○学校と連携を始めよう
学校に支援をしてほしいと要望するときには、
まずは、要望を箇条書きに書き出してください。
できれば、個別の教育支援計画のような形にまとめておくのが望ましいです。

保護者の方に余裕があれば、将来どのように育ててほしいのか（長期目標）、

そのために、学校卒業後にどのような力を身に着けたいのか（中期目標）
今、学ばせたい力（短期目標）を書き出してください。

○支援会議を開催する

もし、通学している学校で支援会議のシステムがあるようであれば、
ぜひ、それを活用してください。

もし、通学している学校に支援会議のシステムがないようであれば、
教頭先生に「（うちの子どもの）支援について相談したい」と言い、支援会議の開催を求めてください。
地域によっては教育委員会で支援会議を行っていることもあるかもしれません。
その場合もまずは教頭先生に相談しましょう。

昔（ほんの数年前）は、学校の窓口は実質、学級担任の先生だったことがありますが、
現在では、学校にも多くの財産があります。

窓口である教頭先生の他にも、
責任者である校長先生、
実際に学校を動かす教務主任や特別支援学校であれば学部主事の先生、
特別支援教育コーディネーターや地域支援の先生、
進路指導主事の先生、
養護教諭の先生などなど。

今、存在している課題にチームで取り組むたものシステムがあるのです。
場合によっては、外部の協力機関が入ることもあります。
保護者や学級担任だけが抱え込む必要はないのです。

せっかく多くの人が集まって開催する会議ですので、
明確を確認することが大切です。

会議開催の目的は、関わっている人が「〇〇ちゃんの応援団であることを確認する」ことです。
決して誰かを追い込んだり、説得したりするための会議ではありません。

最初の１～３回は、目的の共通理解だけで終わってもいいと思います。
互いに信頼関係ができてか、
いよいよ課題を解決していくことを始めます。

よく言われることですが、
会議の開催は、何か起きてから開催されるのではなく、
関係が良好のときから定期的（年１～３回くらい）に開催するのが望ましいです。

何か起きてからの開催は対応に追われることが多く、
建設的な話し合いにならないことがあります。

また、会議を開催することが決まったら、次に、日時（終わりの時間も含む）、開催場所、参加メンバー、会議のゴール（何を話し合うのか）を決めていきます。

もう一つ、会議の前に決めておきたいことがあります。それは、役割分担です。

議論を進め、深めるための司会や学校での様子を伝える役割、記録者などを決めていきましょう。

気をつけてほしいということを書きますね。
会議の内容ですが、「支援をできる／できない」の2択にしないでほしいのです。
多くの場合、いろんな要素が絡まっているので、2択で決められないことがほとんどです。

それを埋めていくのは話し合いしかないのです。
話し合いをするには、互いに信頼しあっていることが基礎になるのです。
そして、学校でできないことは他機関でできないかも併せて検討してください。

つまり、支援会議が、〇〇ちゃんの支援を実行していく機関にしたいのです。

例えばこんな風になってほしいのです。

友達をたたくAちゃん

Aちゃんは友達がもっている絵本やおもちゃが目に入るとすぐにたたいてしまいます。
お母さんはPECSのワークショップを受講し、Aちゃんには「強化子の要求」が適切にできることが重要であると思いました。

しかし、学校の先生はPECSの実施に積極的ではありません。何度、お母さんが必要性を訴えても、「学校は集団生活なのでできません」の一点張りでした。

そこで、支援会議の開催を求めることにしました。
お母さんは、教頭先生に支援会議の開催を求めました。
メンバーには、担任の先生だけではなく、特別支援教育コーディネーター、教頭先生、放課後等ディサービスの支援員、療育機関、保育園の園長先生などに入ってもらいました。

支援会議ではこんな話し合いになりました。

- ・担任の先生はPECSの指導におかしを使わなければならないと勘違いをしていた。
- ・ほかのクラスの生徒に食事制限中の子どもがあり、給食以外の食べ物を置かない取り決めに校内でしていた。
- ・学校では、ワークショップの参加は自由であり、学校として受講を無理強いすることはできない。

- ・ 特別支援教育コーディネーターはワークショップ受講をしており、知識や経験がある。
- ・ 放課後等ディサービスや療育機関では PECS の指導をしている。
- ・ などなど。

結局、このような解決方法が考えられました。

- ・ PECS の指導は療育機関、放課後等ディサービス、家庭で行う。
- ・ 学校では、特別支援教育コーディネーターが中心となって、校内で使えるような強化子を見つける。
- ・ 保護者は教育委員会に多くの先生が研修できるシステムと予算をつけるように要望を提出する。
- ・ 学校の管理職は可能な限り、学級担任が研修しやすい環境を整える。
- ・ 学級担任は、絵カードの作成などの実務を行う。

以上のようにすることで、

一人に責任や行動を押し付けるのではなく、みんなが、〇〇ちゃん応援団になるのです。

何かの縁で出会ったのですから、

みんなで〇〇ちゃんのサポートして、

それぞれが自信をもって〇〇ちゃんにかかわれるようになってもらいたいと思っています。